

## 自己の差異性における他者の役割<sup>1</sup>

立教大学 平田万理子<sup>2</sup>

The roles of others in a difference-related sense of self

Mariko HIRATA

This research investigated a difference-related sense of self in interpersonal behaviors. Participants (n=105) completed a scale for a difference-related sense of self, a scale for affects induced by difference-related word usage, and affective ratings of interpersonal behaviors. Factor analysis of the scale for a difference-related sense of self yielded three factors: 1) the type including others as a target of a distinctiveness desire, 2) the type including others as a source of social comparison, 3) the type including others as a reflection of distinctiveness. These three types differed in the valence of affects produced by both the word usage and the interpersonal behaviors. These results are discussed.

**Key words:** a difference-related sense of self, distinctiveness, uniqueness, social comparison, difference-related words usage

人は皆、それぞれに“その人らしさ”や“自分は他人とは違うという感覚”を持っている。この自己の差異性 (a difference-related sense of self) が対人行動を理解する上で重要であると考え、自他の差異の追求の観点から対人行動理論を定式化し実証的な研究を展開したのは、Fromkin & Snyder(1980)である。Fromkin & Snyderはユニークネス理論 (uniqueness theory) の中で、人は自他の間に適度 (中程度) の類似性がある時に快感情を覚える存在であり、従って過度の類似や差異を意識するとその類似性水準を最適水準に回復させるように行動を起こすとした。換言すると、人には本来他者とは異なるアイデンティティを求める欲求 (ユニークネス欲求; need for uniqueness) があり、これを失する状況において人は不安な気持ちになるため、その不安感を低減させるよ

うに動機づけられているとしたのである。彼らはまた、このような他者との差異を異常や社会的逸脱とは異なるポジティブなものとしてとらえ、このポジティブな面での差異によって、人は他者とは異なる独自のアイデンティティ (separate identity) を持つと同時に社会的受容も満たすことができると考えた。加えて、従来の対人魅力の研究における類似性は“他者と似ている程度”をさすが、ユニークネスの研究における類似性とは“独自性の剥奪”であり、ユニークネス欲求は決して特異なものではなく、あらゆる人が保有する基本的な欲求であるとした。さらに、このユニークネス欲求には個人差が考えられるため、ユニークネス欲求尺度 (need for uniqueness scale) も作成された (Fromkin & Snyder, 1977)。現在までに、ユニークネス欲求の個人差によってさまざまな行動に及ぼす効果が実証的に検討されている (例えば、岡本, 1991; 山岡, 1998)。

自己の差異性に関する近年の注目すべき研究展開の一つは、Brewer (1991) の提唱した最適弁別性理論 (optimal distinctiveness theory) である。

<sup>1</sup> 本研究の一部は、日本グループ・ダイナミクス学会第46回(1998)大会(発表論文集p.256-257.)“ユニークさの自己知覚”で発表された。

<sup>2</sup> 本論文の作成にあたり、ご指導を賜りました立教大学押見輝男教授に深く感謝いたします。

BrewerはTurner, et al. (1987) が唱えた自己カテゴリー化理論 (self-categorization theory) を拡張し、ユニークネス理論とは異なる定式化を試みている。Turnerらは、社会的アイデンティティは個人にとって重要な社会的カテゴリーに所属する感覚と結びついて形成されると考えたが、Brewerはそうした社会的アイデンティティの選択や強さの基になるものとして弁別性 (distinctiveness) があるとし、社会的アイデンティティを2種類の基本的な欲求の緊張状態から派生するものとした。その欲求とは、自己確認や他者との類似を求める欲求と、独自性や個人化への欲求であり (Brewer, 1991, p.477), 社会的アイデンティティは、社会的文脈に対する包含 (inclusion) 欲求と分化 (differentiation) 欲求がうまく調和される範囲で選択され作動すると考えた (Brewer, 1999)。

人の有する類似性追及傾向に関しては古くから社会的比較過程理論 (Festinger, 1954) 関連の研究を通して例証されてきたが、Baumeister & Leary (1995) は、人間の基本的な欲求としての“所属欲求”の観点から、人は対人的なつながりを求めその喪失を拒否するが、このつながりは互いに配慮し合う永続的な相互作用によって維持されると主張している。この見解にも対人的なつながりは集団の結びつきを損なわない範囲で、それぞれの集団成員の独自性を認めることによってより強固なものになるということが仮定されているといえよう。

ところでこれらの諸研究・理論に基づくと、人は、他の人とは違っていたいけれど目立ち過ぎるのは嫌だと考える傾向があるといえる。この微妙な自己の差異性は、対人状況の中で自己と他者のズレを測ることによって意識される。したがって、自己の差異性はそのときどきの状況における社会的比較によって生じるとともに、それによって維持・強化される性質のものである。そこで自己の差異性についての理解は、これまで考えられてきたような動機的なバランスよりもむしろ、状況によって変動するような差異性の維持変容過程の観点から捉えることが有益であるといえよう。そも

そも、自己と他者との間には、ズレは常に存在する。だからこそ、人は日常の対人状況の中で、自分らしく独自の存在を確立しつつ、ネガティブな意味合いを含まない自己の差異性を維持し続けるために、各状況においてそのズレを変容させる能力が必要とされるのである。“この状況において他者とのズレはどの程度か”、“そのズレは (社会的に) 許容されるものなのか”、“自尊感情を損なうことなく差異欲求が満たされるためにはズレをどう調整する必要があるのか”、こうした総合的な自己調整を遂行することによって、初めて差異はポジティブな範囲に留まることができる。対人状況の中で (他者に排されることなく) 自分が他の人と違っていたいという欲求 (ユニークネス欲求) を満たすことは、“自分は自分、百万人の他者が黒でも自分は白だ”というような自律的で変容不可能な独自性の希求ではなく、“この人たちと一緒にじゃ嫌だ。この人たちは黒と言う。ならば自分は白だ”というような変幻自在で変容可能な、他者依存的な差異性の希求であるとみなすことができる。

“白”を選択したのが“一緒になりたくない”相手であれば、容易に自らが過去に選択した白ではなく、“黒”を選択するといった、状況依存的な差異性の希求について検討している先行研究はまだ少ない。

平田 (1997, 1998) は、自己の差異性の状況依存性について日常生活に即した状況で調査を行い、人はどのような状況でどのように自己の差異を意識するのかについて調べた。加えて、その時の差異性の意識に及ぼす個人差要因について検討した。その結果、自己の差異性は“感性・価値観のズレから生じる違和感を体験した時”、“能力や行動が及ぼす孤立感を体験した時”、“集団からの突出感を体験した時”、“笑い・怒りのズレを体験した時”、“知識による違和感を体験した時”、“特別扱いを受けた時”といった比較的ネガティブな文脈で生じることが明らかになった。また、差異性を意識する個人差要因の分析からは、感受性次元に関するパーソナリティ要因の重要性が示唆された。日常生活における差異性の判断ではネガティブな

差異を暗示するような状況も含まれており、にもかかわらずポジティブな差異性を維持するためには状況を的確に見極め、状況に応じて行動を変容させる力が求められるからであろう。ただ、“ユニークでありたい”と願うだけでは、差異を維持するどころか、時として周りの人に自らのネガティブな差異を印象づけることにもなりかねないのである。

このように、状況依存的に自らの差異性を変容させていくためには、人はそこに介在する他者を常に意識していなければならない。そこには、自己と他者のズレを知覚する比較の源泉としての他者、ズレから生じる差異性を反映する他者などさまざまな他者存在が考えられる。そこで、本研究では人が差異性を意識する際に他者がどのような役割を果たしているかを、親和性（自己の差異性に対する緩衝材の機能として他者との親和を重視する）、他者志向性（自他の間で差異が顕在化したとき他者の志向を選択する）、自己顕示性（自己の差異性を強く他者に示す）、流行に対する感受性といった対人行動の側面から明らかにしてみる。加えて、他者の役割の違いに基づく差異性のタイプの違いが自他の差異を表現する言葉の好みや、差異を意識する対人状況で生起する感情に及ぼす影響を調べる。

## 方 法

### 被調査者と手続

被調査者は1998年度の立教大学文学部専門科目を受講中の学生105名（男性15名、女性90名）である。調査は、講義時間の一部を利用して集団実施した。回答の一部に欠損があり、有効回答数はそれぞれの分析において異なっている。

### 使用した質問紙

**自己差異性尺度** 対人状況における自己差異性の行動傾向を調べるために、親和性、他者志向性、自己顕示性、流行の感受性のような対人行動に準

拠して、“自分と同じ感性を持っている人に会うとうれしい”、“人に合わせて行動をすることが多い”、“自分のコレクションを人に見せるのが好きだ”など44項目からなる自己差異性尺度を新たに作成した。回答形式は“非常にあてはまる(5)”から“全くあてはまらない(1)”の5段階尺度とした。なお、具体的な項目は、表1を参照。

**差異表現の好意度と使用度** 自他の差異性に関する表現について調べるために、まず予備調査として、ユニークだと思う人、強い個性を持った人に対して普段どのような表現を使っているかについて高校生・大学生（16～24歳）18名に回答してもらい、集められた42の差異表現を、類似性に基づいて分類した。その結果、27の表現が得られた（図1参照）。そこで、これらの表現を“言われてうれしいか（好意度）”、“他者に対してよく使うか（使用度）”について、“非常にうれしい／非常によく使う（+3）”から“非常に不快である／全く使わない（-3）”までの7段階で評定を求める設問を構成した。

**差異意識状況の感情反応** 自己の差異性が意識される5つの典型的な架空状況を提示し、その際に生起すると思われる快-不快の程度を“とてもうれしい(5)”から“とても不愉快だ(1)”の5段階で評定してもらう感情尺度を作成した。提示した状況は、状況1：自己の差異性が多数の他者によって剝奪されるような状況、状況2：流行に対する耐性を試される状況、状況3：親しい他者との間での差異性が顕現化する状況、状況4：他者の知らないことを表出する状況、状況5：共通の好みを持つ親しい他者との関係を希求する状況である。

## 結 果

### 自己差異性尺度の項目分析と内的整合性

自己差異性尺度44項目の合計得点（得点範囲：99～182、 $M=143$ 、有効回答数100名）の上位33%（34名、149～182点）を高得点群、下位33%（33名、99～136点）を低得点群としてt検定を行った

表1 自己差異性尺度 因子分析の結果と項目内容

項 目	因子1 欲求型	因子2 観察型	因子3 強化型	H <sup>2</sup>
12 意表をつくことが好きだ	.707	.070	.133	.696
44 人とは違うことが好きだ	.701	-.242	.156	.757
11 自分は他人から個性的と思われなくてもよいと思う	-.688	-.125	-.053	.789
41 誰も持っていないような「個性的な人」と思われたい	.687	.082	.350	.775
01 自分の仲間からは「個性的な人」と思われたい	.689	-.077	.077	.796
38 つかみどころのない人になりたい	.631	-.090	-.008	.776
13 自分は「個性的な人間だ」と思う	.582	-.300	.192	.747
09 個性的な人やものに魅力を感じる	.578	-.064	.102	.659
14 つかみどころのない人と友達になりたい	.577	.053	-.083	.661
22 みんなが持っていないようなものに魅力を感じる	.544	.029	.386	.674
35 「個性的だ」と言われることが多い	.527	-.375	.157	.758
42 個性的な友人が多い	.445	-.018	-.139	.484
33 自分だけのコレクションだと思っていたものが「流行りもの」になってしまうと、魅力が減るような気がする	.432	-.154	.337	.625
37 「流行りもの」には反発したくなる	.423	-.247	.023	.697
21 自分の感性を積極的に表に出したい	.379	-.120	.365	.658
18 自分をよく知っている	-.358	-.057	.237	.424
25 自分が「個性的だ」と思うものが、実際にどれくらい個性的なのか知りたい	.352	.016	.221	.644
17 自分と同じコレクションを持っている人に会うといやだ	.258	-.120	.251	.594
06 自分には他者の知らない側面があると思う	.241	.080	.207	.406
03 他人に「あなたは〇〇人だ」と決められるのはいやだ	.240	.040	.021	.497
16 人に合わせて行動することが多い	-.220	.727	-.233	.758
10 みんなと同じじゃないと不安だ	-.083	.570	-.037	.693
05 親しい人が自分と同じ感性を持っているとうれしい	-.117	.544	.128	.587
04 自分の感性がどれくらい人と似ているか気になる	.225	.512	.187	.629
07 人からどう思われているのかが気になる	.107	.501	.009	.686
39 自分の感性を人から共感されなくてもかまわない	-.000	-.451	-.184	.541
34 自分と同じ感性を持つ仲間を増やしたい	-.028	.369	.367	.642
26 どちらかという、自分のコレクションは自分だけで楽しみたい	.005	-.353	-.046	.591
43 自分と同じコレクションを持つ人と仲良くしたい	-.096	.347	.243	.664
30 自分以外の人に対して関心がない	.330	-.343	-.212	.458
20 自分と同じ感性を持つ人と仲良くしたい	-.100	.342	.265	.724
24 他人に自分の全てをさらけ出そうとは思わない	.058	-.310	.058	.539
27 自分のコレクションを他の人と比べるのはいやだ	.166	-.277	.067	.572
40 自分の好みや感性が世間から高く評価され始めるといになる	.263	-.272	-.132	.543
19 世間の流行に疎いほうだ	.195	.065	-.635	.723
28 流行りものはとりあえずチェックする	-.141	.061	.613	.682
02 自分のコレクションを流行らせたい	.218	.140	.591	.637
36 自分と同じ趣味を持った人を見ると競争心が芽生える	.103	.009	.463	.618
23 自分のコレクションを仲間から認めてもらいたい	.270	.302	.458	.705
08 自分のコレクションを人に見せるのが好きだ	.311	.087	.404	.702
29 自分と同じ感性を持っている人に会うとうれしい	.000	.343	.357	.727
32 めだつことが好きだ	.211	.006	.318	.621
31 自分の感性を表に出すことには興味がない	-.220	-.138	-.304	.638
15 自分のコレクションを他の人から認めてもらわなくてもかまわない	-.050	-.074	-.241	.625
固有率	7.491	4.723	2.741	
寄与率	17.0%	10.7%	6.2%	



結果、項目 5, 10, 15, 16, 20, 26, 27, 40, 43 を除いた項目で、高得点群と低得点群の間に有意な差がみとめられた ( $p < .05$ , 項目 19 のみ  $p < .10$ ). また、 $\alpha$  係数を算出したところ、 $\alpha = .837$  であった。

### 自己差異性尺度の因子分析

自己差異性尺度の回答を、主因子法・バリマックス回転によって因子分析し、スクリー・プロットによって 3 因子を抽出した (累積寄与率 34.0%). また、各因子間の相関は、第 1 因子と第 3 因子 ( $r = .23$ ,  $p < .05$ ), 第 2 因子と第 3 因子 ( $r = .26$ ,  $p < .01$ ) で有意だった<sup>3</sup>. 各項目の因子負荷量、および因子の構成内容については、表 1 を参照. なお、各因子における  $\alpha$  係数は、第 1 因子 .70, 第 2 因子 .35, 第 3 因子 .32 であった。

第 1 因子として負荷量の高かった項目は“意表をつくことが好きだ”、“人と違うことが好きだ”などで、他者の役割に着目して解釈すると、他者が差異への欲求の捌け口としての役割を果たしており、この差異性因子は“欲求型 (the type including others as a distinctiveness desire)”といえる。第 2 因子として負荷量の高かった項目は“人に合わせて行動することが多い”、“みんなと同じじゃなきゃ不安だ”などで、この場合の他者は差異を調整する基準として機能しているので、この差異性因子は“観察型 (the type including others as a source of social comparison)”と命名できる。第 3 因子として負荷量の高かった項目は“流行りのものはとりあえずチェックする”、“自分のコレクションを流行らせたい”などで、他者は差異を確認・補強する鏡としての機能を果たしているので、この差異性因子は“強化型 (the type including others as a reflection distinctiveness)”と命名できよう。

### 差異表現の分類 (好意度・使用度)

差異表現の好意度と使用度の回答を、それぞれ、各変量間の平方ユークリッド距離を類似度とし、グループ間平均連結法を用いた階層クラスター分

析によって分類した。その結果、差異表現の好意度 (言われてうれしい程度) については 3 つの、使用度 (他者に対して使う程度) については 2 つのクラスター構造になっていることが明らかとなった (それぞれ、図 1・2 を参照)。また、差異表現の好意度と使用度それぞれの各クラスター間の相関が表 2 である。

**好意度** 第 1 クラスターとして分類された表現は、“おもしろい人”、“個性的な人”、“自分の考えを持っている人”などで、どちらかというポジティブな差異性を持つ人に対する表現であると考えられる。第 2 クラスターとして分類された表現は、“変わっている人”、“不思議な人”、“とらえどころのない人”などで、評価的な側面を反映しない (ニュートラルな) 差異性を持つ人に対する表現であると考えられる。第 3 クラスターとして分類された表現は、“非常識な人”、“冷たい人”、“うちとけない人”などで、社会的な逸脱者やどちらかというネガティブな差異性を持つ人に対する表現であると考えられる。

**使用度** 第 1 クラスターとして分類された表現は、“おもしろい人”、“変わっている人”、“自分の世界を持っている人”などで、多様な評価的含みを持つ表現であると考えられる。第 2 クラスターとして分類された表現は、“常識を超えた人”、“場に染まらない人”、“とらえどころのない人”などで、評価的含みを持たない表現であると考えられる。

### 差異性のタイプと差異表現に対する好みの関係

差異性の各タイプによって、自分が言われてうれしい差異表現や他者に対して使用する差異表現に違いがあるか検討するために、自己差異性尺度の 3 因子と差異表現 5 因子 (好意度 3 因子, 使用度 2 因子) 間の相関を算出した。その結果、差異性のタイプによって差異表現の好意度や使用度に相違がみとめられた (表 3-1~5 参照)。次に、各表現の好意度 (および使用度) を目的変数、自己差異性尺度の 3 因子を説明変数として強制投入による重回帰分析を行った (表 3-1~5 参照)。その結

<sup>3</sup> 第 1 因子と第 2 因子の相関は、 $r = -.13$ ,  $p = .17$ .

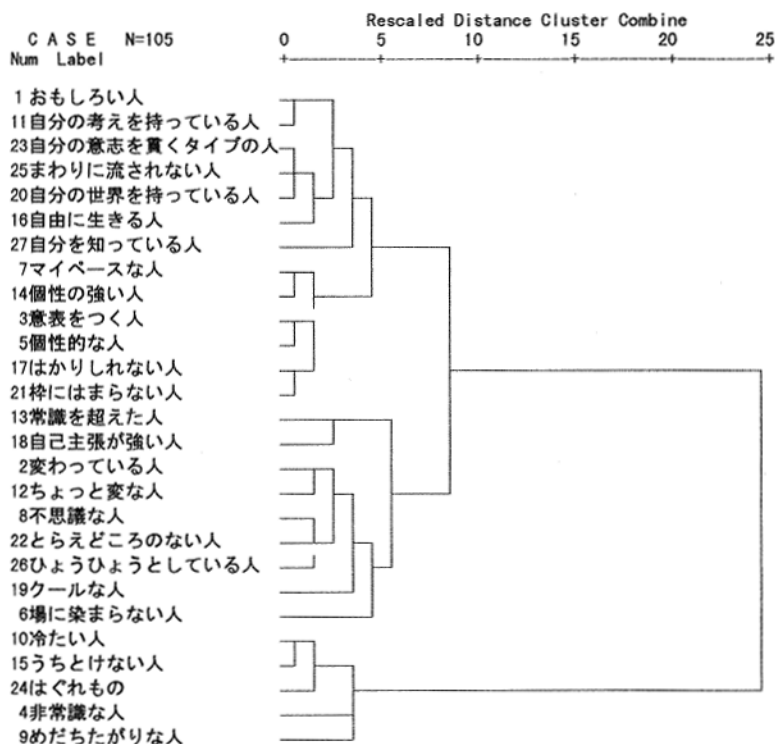


図1 差異表現の好意度におけるデンドログラム

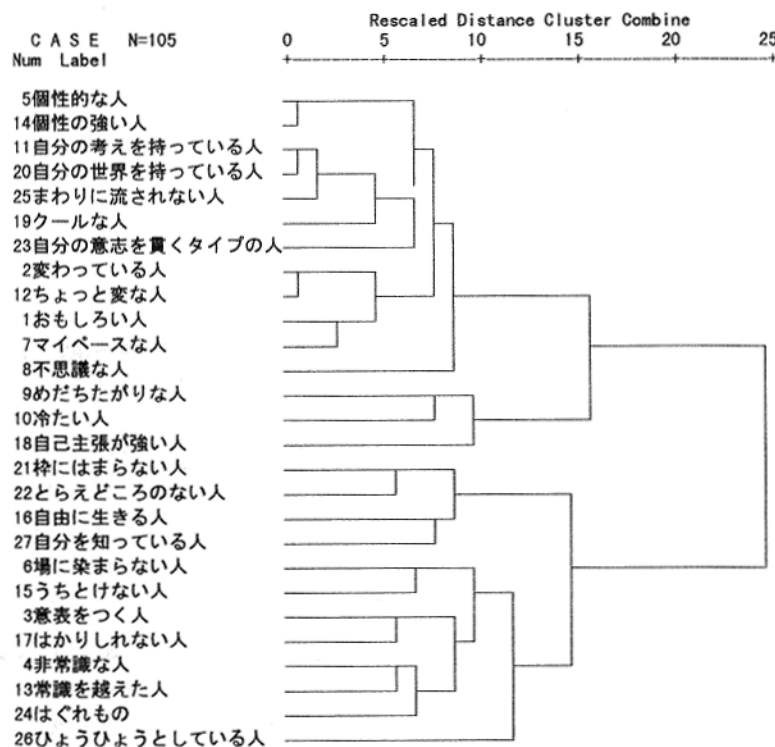


図2 差異表現に対する使用度のデンドログラム

表 2

		好意度 第1クラス ポジティブ	好意度 第2クラス ニュートラル	好意度 第3クラス ネガティブ	使用度 第1クラス 評価あり	使用度 第2クラス 評価なし
好意度	第1					
好意度	第2	.497**				
好意度	第3	.058	.592**			
使用度	第1	.312**	.005	-.183*		
使用度	第2	.154	.021	.115	.485**	

\*\*  $p < .01$  \*  $p < .10$   $N = 105$

表 3-1

	標準偏回帰係数 ( $\beta$ )	相関係数 ( $r$ )
自己差異性尺度		
第1因子 (欲求型)	.454***	.478***
第2因子 (観察型)	.013	-.019
第3因子 (強化型)	.113	.219**
重相関係数 (R)	.492***	

\*\*\*  $p < .01$  \*\*  $p < .05$  \*  $p < .10$   $N = 105$

表 3-2

	標準偏回帰係数 ( $\beta$ )	相関係数 ( $r$ )
自己差異性尺度		
第1因子 (欲求型)	.531***	.497***
第2因子 (観察型)	-.109	-.237**
第3因子 (強化型)	-.218**	-.126
重相関係数 (R)	.563***	

\*\*\*  $p < .01$  \*\*  $p < .05$  \*  $p < .10$   $N = 105$

表 3-3

	標準偏回帰係数 ( $\beta$ )	相関係数 ( $r$ )
自己差異性尺度		
第1因子 (欲求型)	.069	.073
第2因子 (観察型)	-.235**	-.276***
第3因子 (強化型)	-.123	-.168*
重相関係数 (R)	.301**	

\*\*\*  $p < .01$  \*\*  $p < .05$  \*  $p < .10$   $N = 105$

表 3-4

	標準偏回帰係数 ( $\beta$ )	相関係数 ( $r$ )
自己差異性尺度		
第1因子 (欲求型)	.182*	.247**
第2因子 (観察型)	.054	.110
第3因子 (強化型)	.316***	.372***
重相関係数 (R)	.410***	

\*\*\*  $p < .01$  \*\*  $p < .05$  \*  $p < .10$   $N = 105$

表 3-5

	標準偏回帰係数 ( $\beta$ )	相関係数 ( $r$ )
自己差異性尺度		
第1因子 (欲求型)	.064	.140
第2因子 (観察型)	-.162	-.110
第3因子 (強化型)	.236**	.209**
重相関係数 (R)	.276**	
*** $p < .01$ ** $p < .05$ * $p < .10$ $N=105$		

表 4-1

	標準偏回帰係数 ( $\beta$ )	相関係数 ( $r$ )
自己差異性尺度		
第1因子 (欲求型)	-.293***	-.319***
第2因子 (観察型)	.173*	.210**
第3因子 (強化型)	-.010	-.033
重相関係数 (R)	.361***	
*** $p < .01$ ** $p < .05$ * $p < .10$ $N=105$		

表 4-2

	標準偏回帰係数 ( $\beta$ )	相関係数 ( $r$ )
自己差異性尺度		
第1因子 (欲求型)	.112	.060
第2因子 (観察型)	-.061	-.144
第3因子 (強化型)	-.263**	-.253***
重相関係数 (R)	.286**	
*** $p < .01$ ** $p < .05$ * $p < .10$ $N=105$		

表 4-3

	標準偏回帰係数 ( $\beta$ )	相関係数 ( $r$ )
自己差異性尺度		
第1因子 (欲求型)	-.161	-.160
第2因子 (観察型)	-.187*	-.194**
第3因子 (強化型)	-.109	-.192*
重相関係数 (R)	.301**	
*** $p < .01$ ** $p < .05$ * $p < .10$ $N=104$		

果、ポジティブな表現とニュートラルな表現への好意度に対して、欲求型で正の回帰 ( $\beta = .454$ ,  $p < .01$ ;  $\beta = .531$ ,  $p < .01$ ), ニュートラルな表現への好意度に対して、強化型で負の回帰 ( $\beta = -.218$ ,  $p < .05$ ) が見られた。また、ネガティブな表現への好意度に対して、観察型で負の回帰 ( $\beta = -.235$ ,  $p < .05$ ) が見られた。加えて、多様な評価の含み

を持つ表現の使用度、評価的含みを持たない表現の使用度に対して、強化型で正の回帰 ( $\beta = .316$ ,  $p < .01$ ;  $\beta = .236$ ,  $p < .05$ ) が見られた。

#### 差異性のタイプと差異意識状況の感情反応の関係

差異性のタイプの違いにより、差異性を意識する対人状況で生起する感情に違いがあるのかを調

べるために、まず先の5つの状況における感情得点と、自己差異性尺度の3因子との相関を調べた。その結果、差異性のタイプによって感情得点に相違がみとめられた(表4-1~3参照)<sup>4</sup>。次に、各感情得点を目的変数、自己差異性尺度の3因子を説明変数として強制投入による重回帰分析を行った(表4-1~3参照)。その結果、自己の差異性を多数の他者によって剝奪される状況(状況1)の感情得点に対して、欲求型で負の回帰( $\beta = -.293$ ,  $p < .01$ )、観察型で正の回帰( $\beta = .173$ ,  $p < .10$ )が見られた。また、親しい他者との間で差異性が顕現化する状況(状況3)の感情得点に対して、強化型で負の回帰( $\beta = -.263$ ,  $p < .01$ )が見られた。さらに、共通の好みを持つ親しい他者との関係を希求する状況(状況5)の感情得点に対して、観察型で負の回帰( $\beta = -.187$ ,  $p < .10$ )が見られた。その他の状況においては、有意な結果は得られなかった。

## 考 察

本研究では、自己差異性において他者が果たしている役割・機能の観点から、状況依存的な差異性の特徴について調べることを目的とし、自己差異性尺度の因子分析を行った。その結果、他者の役割に応じて自己差異性にも違いがあることが示唆された。

対人状況の中では、差異に対する評価も状況依存的に変化する。その意味で、それぞれの差異は評価的な多面性を持っていると考えられる。そしてその評価は、単に差異への欲求の強さによってではなく、個人が他者とどのように関わっていきたいかという対人志向性によって決定づけられる。他者との親和を求める傾向の強い人は、いかなる時においても差異を親和の阻害要因としてとらえ、

ネガティブな評価を下すであろうし、その反面、他者に自己をアピールする傾向の強い人は、自己を特徴づける差異に対して一貫してポジティブな評価を下すであろう。そして、そのような他者との関わり方(対人志向性)は、関わる他者をどのようにとらえているか、他者にどのような役割を担わせているのかによって影響されると考える。因子分析の結果から、自己差異性において他者が果たしている役割から差異性を分類すると、差異への欲求の捌け口として他者をとらえている“欲求型”、差異性を生じさせる源泉・基準として他者をとらえている“観察型”、自己の差異性を確認するために差異を映し出す鏡として他者をとらえている“強化型”のあることが明らかとなった。そして、この時、欲求型は自己の差異性への強い欲求に動機づけられて実際には対他的な比較を行わなくても差異性を知覚し、観察型は予め自己の差異性を意識していないにもかかわらず自他のズレを意識せざるをえない状況に直面することによって差異性を知覚し、強化型は自己の差異性を対外的に表出することによって改めて顕現化したその差異を知覚すると考えられる。それゆえに、差異性を生じさせる源泉として他者をとらえる場合、基準にならないような逸脱した他者と関わろうとしないであろうし、差異への欲求を満たすために他者を利用する場合、自分が示した差異以上の突出した差異性を持つ他者と関わろうとしないであろう。なぜなら、そのような他者との関係性の中では、それぞれのタイプにおける差異性の知覚ができないからである。

また、このような自己の差異性における他者のとらえ方や関わり方、差異性を知覚する文脈における違いは、差異の表現形態や使われ方、差異を意識する状況の感情的な受け止め方に異なる作用を及ぼしていた。

その分析ではまず、27の差異表現について、“自分が言われてうれしいか(好意度)”, “他者に対してよく使うか(使用度)”の回答結果をクラスター分析によって分類した。その結果、好意度と使用度のクラスター構造が異なる様相を示しているこ

<sup>4</sup> 他者の知らないことを表出する状況(状況4)における自己差異性尺度の因子と感情得点の相関は、第2因子(観察型)において $r = .230$ ,  $p < .05$ で有意であった。流行に対する耐性を試される状況(状況2)においては有意な相関は得られなかった。

とが明らかとなった。好意度については、個々の表現の持つ評価的な含みによって3つに分類された（ポジティブな表現・ニュートラルな表現・ネガティブな表現）。一方、使用度については、多様な評価的な含みを持つ表現と持たない表現の2つに分類された。加えて、そうした構造的な違いだけではなく、表現（項目）内容においてもかなり異なるまとまりを示した。また、それぞれのクラスターにおける相関から、評価的な意味を持つ表現においては、自分が言われてうれしい表現を他者に対して使用し、自分が言われて不快な表現は他者に対して使用しないことが明らかとなった。

次に、差異表現の使われ方と、他者の関わり方の違いに基づく差異性のタイプとの間の関係を見るため、自己差異性尺度の3因子と、好意度・使用度それぞれにおいて分類された表現の相関分析と、自己差異性尺度の3因子を説明変数、表現における好意度・使用度をそれぞれ目的変数とした重回帰分析を行った。その結果、自分に対してポジティブな含みを持つ表現を使用される時、欲求の捌け口として他者をとらえている“欲求型”と、差異を映し出す鏡として他者をとらえる“強化型”は快感情を覚えるのに対し、差異の源泉として他者をとらえている“観察型”では表現の評価的な含みにかかわらず、不快感を体験していた<sup>5</sup>。さらに、欲求型だけが、ニュートラルな表現に対しても快感情を覚え、ネガティブな表現に対しても不快感を体験していなかった。他者に対する使用については、評価的な含みを持つ表現において、欲求型と強化型で使用される傾向が高かった。加えて、強化型では評価的な含みを持たない表現にお

<sup>5</sup> 相関分析においては“強化型”とも関わりが見い出されたが、重回帰分析ではその影響は見られなかった。また、“観察型”の数値は、統計的には有意ではなかった（ $r = -.02$ ,  $p = .85$ ）。しかしながら、全体的に負の相関の傾向が見られたため、ここではあえて他の表現と弁別しなかった。

<sup>6</sup> 他者の知らないことを表出する状況（状況4）において、観察型で不快感を体験したことに関しては、重回帰分析の結果、有意ではなかったため、ここでは省略した。

いても使用される傾向が高かった。これらから、他者のとらえ方（他者の役割）の違いに基づく自己の差異性別に、差異を示す表現の使われ方に違いのあることが明らかとなった。差異性を映し出す鏡として他者をとらえている場合、自ら認識する差異性を確認しない表現を好まないであろうし、他者を差異への欲求の捌け口として捉える場合、欲求をぶつけることにのみ関心があるので、表現の評価的な含みに関わらずポジティブな反応を示すのであろう。さらに、このようなタイプの差異性は、他者に対して用いる場合でも、表現に含まれる評価的な意味合いを配慮せず、無差別に乱用するのであろう。また、差異の源泉として他者をとらえている場合、その表現の持つ評価的な含みが投影される形で感情の生起に違いをもたらすと考えられる。したがって、ポジティブな表現に対して快感情を、ネガティブな表現に対して不快感を体験するのであろう。

本研究ではまた、差異を意識する状況の感情的な受け止め方と、差異性の違いとの間の関係を明らかにするため、自己差異性尺度の3因子と5つの対人状況における感情得点の相関分析と、自己差異性尺度の3因子を説明変数、差異を意識する5つの対人状況で喚起される感情を目的変数とした重回帰分析を行った。その結果、自己の差異性を多数の他者によって剝奪される状況（状況1）において、欲求型では不快感が喚起され、その逆に、観察型では快感情が喚起されることが明らかとなった。また、親しい他者との間で差異性が顕現化する状況（状況3）において、強化型で不快感が喚起されることがわかった。加えて、共通の好みを持つ親しい他者との関係を希求する状況（状況5）において、観察型で不快感が喚起されることが明らかとなった<sup>6</sup>。一般に、状況1のような差異性の剝奪状況では、人は不快感を体験すると考えられるが、他者を差異の比較源泉としてとらえている場合には、単純に比較の源泉となる他者の存在によって一貫したフィードバック（この場合、“差異がない”）を得ることができるため、安定した自己概念を保つことができ、快感情を喚起した

のかかもしれない。また、他者を欲求の捌け口としてとらえる場合、他者はただ“違っていたい”という欲求をぶつける対象でありさえすればよいのであり、したがってこのような剥奪状況に対する感情には何ら影響を及ぼさないとも考えられるが、欲求を満たすために取り出したカードが切り札にはならないような状況において、それでもなお“違っていたい”という欲求を充足するのは困難であり、それゆえ、本研究において不快感を体験した結果を示したのではないであろうか。状況3については、差異性を映し出す鏡として他者をとらえる場合、顕現化した差異に対してポジティブな反応を示し、それゆえ快感情を覚えると考えられるが、本結果からはそのような結果は得られなかった。“親しい他者”というのが特別な意味を含んでいたため、顕現化した差異をポジティブに受け取る以上に、そのような者との差異から社会的逸脱などを連想したからなのかもしれない。また、この傾向は、他者を差異の源泉としてとらえる状況5における反応と共通する部分を含みうる。そのような状況では、共通の好みを持つ親しい他者からもたらされた差異性が、関係を継続する障害ともなり得るため、不快感を体験したとも考えられるのである。しかしながら、このような解釈の妥当性については、本研究の結果だけでは証明することができない。今後は、今回の差異表現の分類結果を踏まえ、人がそれらの表現を自己や他者に対して使用する時、ポジティブな文脈で使用するのか、ネガティブな文脈で使用するのかについて調べ、それらが他者の関わり方によってどのような相違を示すのかなどについて更なる研究を進め、自己の差異性における状況依存性の理解に努める必要があるであろう。

#### 引用文献

- Baumeister, R. F., & Leary, M. R. 1995 The need to belong: Desire for interpersonal attachments as a fundamental human motivation. *Psychological Bulletin*, **117**, 497-529.
- Brewer, M. B. 1991 The social self: On being the

same and different at the same time. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **17**, 475-482.

- Brewer, M. B., & Pickett, C. L. 1999 Distinctiveness motives as a source of the social self. In Tyler, E. T. R., Cramer, R. M., and John, O. P. (Eds.), *The psychology of the social self*. New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates. 71-87.
- Festinger, L. 1954 A theory of social comparison process. *Human Relations*, **7**, 117-140.
- Fromkin, H. L., & Snyder, C. R. 1977 Abnormality as a positive characteristic: The development and validation of a scale measuring need for uniqueness. *Journal of Abnormal Psychology*, **86**, 518-527.
- Fromkin, H. L., & Snyder, C. R. 1980 *Uniqueness. — the human pursuit of difference.* — Plenum.
- 平田万理子 1998 対人状況における自他の特異性知覚 立教大学文学研究科 1997 年度修士論文 (未公刊)
- 平田万理子 1997 心理的ユニークネスに関する研究(1)～ユニークネス知覚状況からの分析～日本社会心理学会第38回大会発表論文集, 264-265.
- 平田万理子 1998 ユニークさの自己知覚 日本グループダイナミクス学会第46回大会発表論文集, 256-257.
- 岡本浩一 1991 ユニークさの社会心理学—認知形成的アプローチと独自性欲求テスト— 川島書店
- Turner, J. C., Hogg, M., Oakes, P., Reicher, S., & Wetherell, M. 1987 *Rediscovering the social group: A self-categorization theory*. Oxford, England: Blackwell.
- 山岡重行 1998 ユニークネス欲求の個人差と自己の概念化傾向の検討 立教大学心理学科研究年報, **40**, 73-79.